

竹取物語

今は昔 竹取の翁という

今は昔 竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光たり。それを見れば、三寸ばかりなる人。いとうつくしうていたり。

翁いふやう、「我朝ごとに夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の媪にあづけてやしなはず。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れてやしなふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくることかさりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。(後略)



今は昔、竹取の翁という者がいた。野山に入り、竹を取っては、いろいろな物をつくるのに使っていた。名前を「さぬき(地名:奈良の飛鳥地方、四国ではない)のみやつこ」と言った。(ある日のこと)翁がいつも取っている竹の中に、根本が光る竹が一本あった。不思議に思つて、近くに寄ってみると、竹筒の中が光っている。筒の中を見ると三寸(約9センチ)ばかりの女の子が、たいそうかわいらしい姿でそこにいた。

翁が言うことには、「わたしが毎日、朝に夕に見る竹の中にいらっしゃったからわかりました。わたしの子になるべき人なのだろう」と言って、手のひらに入れて、家を持って帰った。妻の媪にまかせて育てさせる。かわいらしいこと、この上ない。とても小さいので、竹で編んだ籠に入れて育てる。

竹取の翁が竹を取る時、この子を見つけてから後に竹を取ると、節の隔てた間に、黄金の入った竹を見つけることが、たび重なった。こうして翁はだんだん裕福になった。(後略)

日本に現在残っている最古の物語「竹取物語」の書き出し部分です。

竹取物語は平安時代初期に書かれたと考えられています。「物語」という言葉は、最初は「人が集まって日常生活で見聞きしたことや、興味をひいたうわさなどを、気軽におしゃべりする」という意味で使われていました。人々が集まって話をしているうちに、その中で強く心に残った話を書き留めていったことは想像できます。そのうちに、話をもっと面白く、多くの人が楽しめるようにと、新しくつくったり、つくり替えた部分などが加わって、変化していき、やがて文学としての「物語」が生まれたのではないかと考えられています。

物語が、口に出して「語る」ことからはじまった印は、原文の中にもあります。

「竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに」という一文です。試しに読んでみてください。流れるようなリズムが感じられないでしょうか。

ここではまだ名前のない9センチほどの女の子は、一か月ほどで普通の大きさの女の子に育ち、成長していきます。「なよたけのかぐや姫」と名前がつけられ、より大切に育てられます。それからのあらすじは、おとぎ話で紹介されているとおります。

かぐや姫は五人の求婚者に、結婚の条件として、手に入れるのが難しい貴重な物をほしい

と要求します。一見、わがままとも思える難題を出す理由は、おとぎ話の中では、あまり明確に書かれていませんが、竹取物語では、はっきりと理由を話しています。この五人は世間にくらでもいる程度の女性でも、少し容貌がすぐれていると聞くと、手に入れたと思う人たちだったのです。かぐや姫は、翁にはっきりと告げます。

◎原文

世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らずは、あひがたしとなむ思ふ

◎現代語訳

どんなに高貴な人でも、その心（愛情）の深さを知らなくては、結婚できません

かぐや姫の面白いところは、はっきりと自分の考えを告げる女性であるということかもしれません。

当時、女性のはっきりと自分の考えを告げて、意志を通すことが難しい時代でした。かぐや姫の出した条件に、あれこれと策をめぐらして、結局、失敗してしまう人たちの物語を読み、笑いながら痛快な思いをした人もいたのではないのでしょうか。



◎平家の人々の没落がはじまり、木曾義仲が平家を都から追い落とす

平家物語は、平家一門（特に平清盛）を「悪」として強調することで、滅亡の理由を説明していきます。源氏との初戦、富士川の合戦で水鳥の羽音に驚いた平家軍は、戦わずして都に逃げかえってしまいます。源頼朝は東国の状況が不安定なので、軍を都に進めることなく、拠点である鎌倉に引き返します。奈良では、興福寺の僧兵（寺を護衛する武装僧侶）が騒動を起したため、平家は鎮圧に向かいますが、誤って多くの寺社を焼いてしまいます。これで平家は仏罰で滅亡するという理由ができるのです。この騒動の中、清盛は都を福原に移し、また京都に戻ります。清盛の身勝手なふるまいに人々の心身は乱れます。この時代、京都を大火や暴風が襲いました。当時、天災は国を治める者のおこないが悪いからだという考え方があったこともあり、心が繊細な高倉天皇は、心労のため亡くなってしまいます。人々はこの天災は、平家が政治をおこなっているせいだと信じるようになります。

清盛の長男 重盛が死去します。重盛は温厚な性格で、情け深く、朝廷との調整や父の行動をいさめる役でした。物語では平家の中の良心のように描かれ、重盛を失うことで、平家の運も尽きたことをあらわしています。やがて清盛も悪行の報いとして熱病にかかり、死を迎えます。

平家を都から追い落としたのは、木曾義仲でした。平家も大軍を出して戦いましたが、地形をよく知る義仲の計略で敗北し、多くの兵を失います。義仲はそのまま京に攻め上り、平家一門は幼い帝（安徳天皇）と三種の神器を持って、京を落ちて西国に向かいます。後白河法皇は平家に拉致されるのを恐れて、いち早く比叡山に逃げます。法皇を捕らえられなかったことが、平家が滅亡する大きな原因となります。義仲は都から遠い山国で育つため、宮中の礼儀を知りません。がさつで粗野な性格として描かれています。義仲一党の粗暴なふるまいに後白河法皇はじめ貴族たちは、義仲を見限って、源頼朝を征夷大將軍とします。義仲は怒り、後白河法皇を幽閉し

てしまいます。頼朝は義経と源範頼（頼朝の同母弟）に、京に入り義仲を討つように命じます。義経軍は強く、義仲は木曾に戻る途中で、討ち死にします。

◎源平の戦い、平家一門の滅亡

平家は一谷（兵庫県）、屋島（香川県）を拠点とし、いまだに勢力を保っていました。平家が三種の神器を手にしていることから、都では、平和的な交渉で天皇と三種の神器を取り戻してはどうかと考える一派と追討するべきとする一派の間に議論もありました。しかし後白河法皇の心は平家追討に決まっていたため、源義経を総大将として源氏と平家の最終決戦がはじまります。

源義経は天才的な戦略の持ち主として描かれています。難攻不落と言われた一谷を、わずかの間に攻め落とします。一谷の戦いで、平家は総崩れとなり、人々の無残な最期が描かれます。

生き残った平家一門は海に逃れますが、義経は攻撃の手を緩めません。海での戦いに慣れていない東国武士の間には、義経の作戦や命令に不安を感じる武将が出てきます。義経は自らに強い自信を持っていて、自分一人の判断で命令することが多かったため、義経の行動を監視するようにと頼朝から命令を受けていた梶原景時とは、議論で口論になることも多く、景時は義経の独断と性格を憎むようになっていきます。屋島の戦いも結果的に義経が先行して、平家を追い落とし、四国や九州にはもう平家に味方する兵はいなくなり、最終決戦は壇之浦。平家一門も策をたてますが、見破られていました。激しい戦いが終わり、幼い帝を含めて、平家一門は海に沈むこととなります。